

昔むかし、あるところに、お百姓がいて、息子が三人ありました。一番下の息子はヘルムという名前で、少しまぬけでした。お父さんは、ヘルムがばかなことをしでかすたびに、むちでたたいてなおそうとしました。でも、ヘルムはいつだってばかなことをするものですから、毎日毎日むちでたたかれました。

あるとき、村のまんなかに、とつぜん、木が一本はえてきました。それは、これまでだれも見ることがなく、本にもものっていないような木でした。

木は、ずんずんのびていきました。二、三日すると、教会の塔よりも高くなり、二、三週間たつと、もう木のとっぺんは雲の中に見えなくなってしまいました。村の人たちは、木の下に集まって、わいわいがやがやいいあいました。

「これを登っていったら、どこまで行けるんだらう」

「木のとっぺんは、いったいどうなってるんだらう」

そのうち、ほんとうに木に登っていく人がでてきました。みんな木ぐつを何足も持っていて、とちゅうではきつぶした木ぐつを下に落としながら登っていきました。でも、ほとんどの人は、二、三日たつともう下りてきました。なかには、目じるしの木ぐつも落とさず、登ったきり二度と下りてこない人もいました。

ヘルムの兄さんたちも登ってみましたが、すぐにあきらめて下りてきました。

しばらくすると、木に登ろうとする人はだれもいなくなりました。

ある日のこと、ヘルムが登ってみようといいました。ヘルムは、おとうさんに、「木ぐつを十二足と食べ物をつぱいつめたリュックサック、それに鉄のおのを用意してよ」とたのみました。

村の人たちは、みな、ばかにして笑いましたが、ヘルムは、さっさと登っていきました。

まる一日が過ぎましたが、ヘルムは下りてきません。かわりにすっかりすりへってあなのあいた木ぐつが落ちてきました。村の人たちは、ぼろぼろになった木ぐつを見てびっくりしました。

それからは、毎日、木ぐつがすさまじいいきおいで落ちてきました。村の人たちは、「あいつ、きつと、どんどん登っていつてるんたらうなあ」といいあいました。

ヘルムは、木から落ちないように鉄のおので体をささえながら、ずんずん高く登っていききました。

何日目かの夜のこと、ヘルムが寝る場所をさがしていると、木にほらあながあいていて、かすかな光がもれていました。のぞきこむと、ほらあなの中に、おばあさんがひとりすわっていました。おばあさんは、ヘルムが今まで見たことも聞いたこともないほどみにくい顔をしていました。

ヘルムは、ほらあなの中に入って行って、おばあさんに話しかけました。おばあさんはとても親切で、おいしいご飯をごちそうしてくれて、ひと晩とめてくれました。ヘルムが、

「木のてっぺんまであとどのくらいかかるんですか」とたずねると、おばあさんはいいました。

「そうだねえ、ぼうや。まだだいぶ遠いよ。わたしはまだ月曜日だからねえ。おまえはこれから火曜日のところへ行き、つぎに水曜日のところへ行つて、そのあとじゅんじゅんに、土曜日のところまで行かないといけないんだ。でも、土曜日のところまで行つたら、てっぺんまではもうすぐだよ」

つぎの日、ヘルムがまた登っていくと、またほらあながありました。

そのほらあなにも、おばあさんがひとりすわっていました。おばあさんは、前のおばあさんよりもっとみにくい顔をしていました。ヘルムはびっくりして木から落っこちそうになりました。

おばあさんは、ヘルムに晩ご飯をごちそうして、ひと晩とめてくれました。

つぎの朝、ヘルムが出かけようすると、おばあさんは、

「わたしは火曜日だがね、水曜日になていなくてほんとによかったと思うよ。水曜日ときたらとてもまともに見られるような顔じゃないんだよ」と忠告してくれました。

それで、ヘルムは水曜日のはらあなをうまくよけて登っていききました。

ところが、木曜日のおばあさんときたら、もつとずつとみにくい顔をしていました。

ヘルムはじつとがまんして、金曜日のおばあさん、土曜日のおばあさんと、つぎつぎに会っていききました。

土曜日のおばあさんに別れをつけて少し登ったところで、さいごの木ぐつがすりへつてだめになりました。鉄のおの刃がすっかりかけてしまいました。でも、いまさら引

きかえすことはできません。しかたなくまた一生けんめい登っていきました。

とつぜん、石の天井につき当たりました。天井にはへこみがあつて小さなドアがついていました。ドアを開けると、広い野原がひろがっていました。ヘルムはお腹がすいて気をうしない、草の上に丸太のようにたおれてしまいました。

気がつくと、目の前に美しい木がたくさん植わった庭があつて、そのむこうにお城が見えました。

(あんなりっぱなお城だもの、きつとすばらしいごちそうを出してもらえらるうなあ)  
ヘルムはそう思つて立ちあがると、お城にむかつて歩きだしました。

しばらく行くと池があつて、池のほとりに、いやらしい大きなアマガエルがいました。

アマガエルはヘルムにむかつて、

「長いことあんたを待つてたんだよ。あんたしか、わたしをすくうことができないんだから」といいました。ヘルムが、

「いったいどうしたらおまえをすくうことができるんだい」とたずねると、アマガエルはいいました。

「わたしにキスを三回しておくれ」

ヘルムは、

(へえ、なんでぼくがそんなことしなくちゃならないんだろ) と思いましたが、近づいていってキスをしました。

そのとたん、アマガエルは大きなへびにすがたを変えました。へびは、ぴかぴか光る冷たい目でヘルムを見つめ、口から毒をたらたら流していました。

それでもヘルムはもういちど、へびにキスをしてやりました。

そのとたん、へびはおそろしい竜にすがたを変えました。竜は、長いしっぽを水の中ではげしく動かし、口から火をふいていました。

それでもヘルムは、竜の頭をおさえつけて、三度目のキスをしました。

そのとたん、竜は、美しい娘になりました。娘は、

「とうとうやりとげてくださったのね。これでもう、わたしたちはいつもいっしょよ。

あなたは、のぞみのものを何でも手に入れることができるわ」といいました。

ヘルムと娘は結婚しました。

天上の世界はすばらしく美しいところでした。妻はヘルムを庭やお城のすみずみまで

案内してまわりました。けれども、一つだけ、ヘルムに見せない部屋がありました。

「この部屋にはけっして入らないでください。さもないと、わたしたちにたいへんな不幸がおとずれますから」と、妻はいいました。

ふたりは長いあいだ楽しく幸せにくらしました。けれども、見てはいけない部屋の前を通るたびに、ヘルムは思いました。

(ぼくはこの城の主人じゃないか。どうしてこの部屋に入っではいけないんだ)

とうとうあるとき、ヘルムはその部屋のかぎを回して中へ入っていききました。これと違って変わったことはありませんでした。ただ、窓から人間の世界が見え、ふるさとの家が見えました。それを見たたん、ヘルムはうちがなつかしく、悲しくなってしまうました。

ヘルムがもの思いにしずんでいるのを見て、妻は、どうしたのかとたずねました。ヘルムが、

「両親に会いたくなつたから、いちど家に帰りたいんだ」と答えると、妻は、深いため息をついていいました。

「では、あの部屋にお入りになったのね。それならしかたがない。馬小屋に白い馬がいるから、あれに乗ってお帰りなさい。でも、ひとつだけやくそくしてください。わたしが美しいことをだれにもいわないで。さもないと、私たちにたいへんな不幸がふりかかりますから」

ヘルムは妻にかたくやくそくすると、馬小屋へ行きました。そして、白い馬に乗ったかと思うと、馬は空高くまいあがり、雲をつきぬけ、風のように飛んでいきました。そして、暗くなる前に、ヘルムの家の前におり立ちました。

両親はおどろき、このりっぱな男がヘルムだとは信じてくれませんでした。そこで、ヘルムはこれまでのことをすっかり話しました。でも、美しい妻のことだけはだまっていきました。

ヘルムのことはずぐに村じゅうに知れわたりました。県の県知事がヘルムを食事にまねきました。県知事には娘が三人ありました。県知事は、ヘルムの馬や、着物がどれも上等なのを見て、ヘルムを娘のむこにしたいと考えました。そこで、ルムは、

「じつは、私には妻がいるのです」と話しました。すると、県知事はいいました。

「でも、そのおくさんは、きつとたいした人じゃないんでしょう。でなければ、ここに

つれてきたはずですからね」

ヘルムは、思わず、

「なんですって。わたしの妻は、あなたの娘さんを三人あわせたより千倍も美しいんですよ。妻の足のうらはあなたの娘さんの顔よりも美しいんですから」といつてしまいました。そういい終わるか終らないうちに、目の前に妻があらわれました。

「わたしの美しいことをいいさえしなければ、これからもいっしょにくらせたでしょうに。こうなった以上、あなたは、暗闇の世界をめぐり歩いて、わたしをさがさなくてはなりません」

そういうやいなや、妻のすがたは消えました。

ヘルムは馬小屋にかけつけましたが、白い馬はいませんでした。そこで、悲しみにくられてうちへ帰り、両親に別れをつけると、暗闇の世界をさがしに旅に出ました。

村から村へ、国から国へと、ヘルムは何年も何年も歩きつづけました。天までとどく木に登ったときはいた木ぐつよりも、たくさんのくつをはきつぶしました。けれども、暗闇の世界がどこにあるか知っている人は、だれもいませんでした。

あるとき、ヘルムは、大きな暗い森を三日も歩きつづけているうちに、水車小屋にでました。水車小屋にはおじいさんがいて、

「わしは、暗闇の世界の人たちのために小麦粉を作っているこなひきだよ。七百年の昔から、この森に人間が来たことはいちどもなかった」といいました。

「おじいさん、どうすれば暗闇の世界へ行けるのか、どうか教えてください」と、ヘルムはたのみました。

「暗闇の世界へ行くなんて、おまえにはむりだ。どうしたって行くことはできない」と、おじいさんはいいましたが、ヘルムが何度もたのむので、とうとうこういいました。

「あした、怪鳥グライフがここにやってきて、たるいっばいにつめた小麦粉を暗闇の世界へ運んでいく。そのときいっしょに行くといい」

ヘルムはその晩、水車小屋にとめてもらいました。そして朝になると、小麦粉のたるの中にかくれて、怪鳥グライフがやって来るのを待ちました。

まもなく、ザーザーと羽の音が聞こえ、怪鳥グライフが飛んできました。グライフは、たるをつめに引っかけて、さっとまいあがりました。

しばらく飛んだあと、グライフはたるをおろして、どこかへ飛び去りました。

ヘルムは、たるからはい出しましたが、あたりはまっくらやみです。水のざわざわ流れる音だけが聞こえました。ヘルムは、よつんばいになって音のするほうへはっていき、やつとのことで、川にかかっている橋を見つけました。手さぐりで橋をわたっていくと、はるかかなたに、かすかな光が見えました。ヘルムは、その光をめざして歩きだしました。いくら歩いてもなかなか光のところへ行きつくことができません。

ようやく、光の近くまでたどり着くと、そこは暗い谷になっていて、女がふたり、明かりをかざして歩いていました。女たちは、薪を集めていました。ひとりは妻で、もうひとりは小間使いの娘でした。

そのとき、妻がヘルムに気づきました。妻はおおよろこびしてヘルムの手をとり、うちへつれて行きました。

妻は、ヘルムを部屋に連れて、いいました。

「このベッドでお休みなさい。わたしはこれから音楽をかなでに行かなくてはなりません。十一時になったら帰ってきて、この上のわたしの部屋に入ります。そのあと何が起ころうとも、じっとしていてくださいね。動いても、声を立ててもいけませんよ」

そういうと、妻は行ってしまいました。

ヘルムは暗闇の中で長いこと待ちつづけました。ようやく十一時になって、妻が帰ってきたらしく、上の部屋で話し声と歩く音がしました。それから静かになりました。

とつぜん、気味の悪い音を立てて、ゆうれいたちが部屋の中に入ってきました。ヘルムは、ベッドの中でねむったふりをしていました。ところがゆうれいたちは、ヘルムをなぐったりついたりしはじめたのです。ヘルムは大声でさけびそうになりましたが、がまんして、指一本動かしませんでした。

やがて十二時の鐘が鳴ると、ゆうれいたちはあとかたもなく消えてしまいました。

そこへ、妻が入ってきて、ヘルムの体じゅうのきずを薬をぬってくれました。すぐに痛みはなくなりました。妻は、ワインとすばらしいごちそうを運んできてヘルムを元気づけました。食べおわると、ヘルムは横になってぐっすりねむりました。

長い時間がたって気がつくとき、妻が明かりを手にしてベッドのわきに立っていました。「わたしはまた薪を集め、音楽を奏でに行かなくてはなりません。十一時に私が帰ってきたのが分かったら、ベッドに横になって、じっとしててくださいね」

ヘルムは、また長いこと待ちました。そして、ようやく上の部屋から妻が帰ってきた

音が聞こえると、ベッドに入りました。

そのとたん、ゆうれいたちが、大声をあげて、ガタガタ音をさせながら入ってきました。ゆうれいたちは、きのうよりもはげしくヘルムをさしたりひっかいたりしました。ヘルムは体じゆうきずだらけになりましたが、歯をくいしばってたえました。すると、ゆうれいたちは、大きななべを運んできました。なべには、にえたぎった油が入っています。ゆうれいたちはヘルムの手足をつかんで持ち上げ、なべに放りこもうとしました。

(もうだめだ)

ヘルムがさげぼうとしたとき、十二時の鐘が鳴りました。ゆうれいたちはあとかたもなく消えました。

妻が、ぬり薬とワイン、おいしいごちそうを運んできて、ヘルムが勇敢にたえぬいたことをほめました。

「でも、一番ひどいのは三度目です。どんなことが起ころうとも、がまんしてくださいね。さもないと、こんどこそほんとうに、二度と会えなくなってしまうす」

さて、長いこと待って十一時になると、ヘルムはベッドに入って、ゆうれいたちを待ちかけました。ところが、いつまでたってもゆうれいたちは入ってきません。

(へんだなあ)

じつと動かないで聞き耳をたてていると、まどの外に足音がして、おとうさんの声が聞こえました。

「ヘルム、ここにいたのか。わたしだ。ずいぶん長いことさがして、やっとたずねあててきたよ。戸を開けておくれ」

まちがいなくおとうさんの声です。ヘルムの心臓は、ドキドキと打ちましたが、じつと動かず、だまっていました。

しばらくすると、また足音が聞こえ、こんどはおかあさんの声がありました。

「ヘルム、そこにいるんでしょ。わたしですよ、さあ、早く中へ入れてちょうだい」

けれども、ヘルムは動きませんでした。するとまた、おとうさんの声が、いっそう強い調子でさげびました。

「わしは、むかし、おまえにつらく当たって、ひどい目にあわせてしまった。だが、もうそんなことはわすれておくれ。この年とったわしをゆるしておくれ」

おかあさんの声もさげびました。

「ヘルム、いったい何を怒っているんだい。どうか、この戸をあけておくれ」  
それから、ふたりに声をそろえてさげびました。

「助けておくれ。このまっくらな冷たい外にいます、ここへ死んでしまおうよ。けどものに食べられてしまおうよ」

ヘルムは、考えました。

（あれは、ゆうれいなんかじゃない。本当のおとうさんとおかあさんだ）

ヘルムが返事をしようとしたとたん、鐘が十二時を打ちました。たちまちまどの外は静かになりました。

（ああ、やっぱり、ゆうれいだったんだ。でも、いちどめよりも二度目よりも、こんどのが、いちばんつらかったなあ）

そう思ったとたん、ヘルムは疲れはてて、ぐっすり眠りこんでしまいました。

目がさめると、あたりは明るい昼間でした。ヘルムは、りっぱな部屋の中にいました。ベッドのそばには美しい妻がほえんで立っていました。

ヘルムはとび起きて妻をだきしめました。

そのあとふたりがどうなったのか、わたしはまったく知りません。でも、ふたりがまたいっしょになれたんだから、それでもうじゆうぶん。

村上郁再話

資料『世界のメルヒェン図書館1』小澤俊夫編訳／ぎょうせい